Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

観光地づくりオーラルヒストリー　＜第 8 回＞

「ホスト・ゲスト論で語る観光」

京都大学名誉教授　三村　浩史氏

1934（昭和 9）年和歌山市生まれ。1959 年京都大学大学院工学研究科修士課程修了。大阪府企業局技師を経て 1960 年京都大学工学部助手、1964 年京都大学工学部助教授。この間、地域計画、居住環境計画の立場から観光を研究。1968 年に「地域空間のレクリエーション利用に関する研究」で工学博士。1985 年京都大学教授、1997 年京都大学名誉教授。

三村浩史氏の年表

【略歴】

1934 年	和歌山市生まれ
1959 年	京都大学大学院工学研究科修士課程修了
1959 年-1960 年	大阪府企業局技師　千里ニュータウン開発計画に従事
1960 年	京都大学工学部助手
1964 年	京都大学工学部助教授
1968 年	「地域空間のレクリエーション利用に関する研究」論文で工学博士
1985 年	京都大学工学部教授　建築学科および工学研究科環境地球工学専攻で居住地計画・都市計画の講座を担当
1997 年	京都大学退官、名誉教授
1997 年-2005 年	関西福祉大学教授

【主な著書・編訳書】

1971 年『都市を住みよくできるか』
1978 年『都市計画と中小零細工業』（共著）
1980 年『人間らしく住む都市の居住政策』
1981 年『歴史的町並み事典』（共著）
1985 年『世界のすまい 6000 年』（共訳）
1987 年『すまいの思想』（ＮＨＫ市民大学）
1989 年『すまい学のすすめ』
1990 年『サンアントニオ水都物語』（共訳）
1991 年『観光・リゾート開発の人類学』（共訳）
1991 年『住環境を整備する』（編共著）
1993 年『近代建築物の保存と再生』（共著）

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

1997 年『地域共生の都市計画』
2006 年『歴史都市の破壊と保全・再生』（編共訳）
2010 年『京町家の再生』（共著）

三村浩史氏への取材風景
（2015 年 10 月 6 日　京都市景観・まちづくりセンターにて）

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

1. 観光への接近

【なぜ観光の道を選んだのか】

●建築学科での恩師との出会い

私の生まれは和歌山県和歌山市です。紀ノ川の河口、南側の高台に伏虎城と呼ばれる天守閣が優美なたたずまいをみせています。その城下町の西北海岸の一帯には紀淡海峡から季節風が吹き上げた砂の丘がひろがり、新しい町が開かれました。私の生家はその町の一角にありました。

三村の本家は実業家で、紡績業や金融業を営んでいました。私の父は紀ノ川中流の農家出身で三村家の娘婿養子となり新宅を設けました。職業は小学校教諭で師範学校時代から油絵が趣味で、独立展に出したりしていました。自宅の 2 階はアトリエで、絵描き仲間の出入りもあって、美術に親しめる家庭環境だったと思います。私も見様見真似で絵を描いたり、中学・高校では鉄道模型やラジオの組立てなどをしていました。大きくなったらラジオ屋さんになるか建築の設計屋さんになるか。大学受験の学科選択では第一志望を建築に、第二志望を電気にしましたが、どちらかにこだわっていたわけではありません。浪人する余裕もありませんでした。後からおもえば実に大きな選択だったわけです（笑）。

入学して、とりあえず「美術研究」サークルに入れてもらい、博士コースの先輩に連れられて主に近畿地方の社寺や仏像などを訪ね、史跡名勝を巡りました。観光という点から振り返ると、それまで旅行などまともな体験はありません。小学校時代は軍事体制下、戦災、敗戦、中学校・高校時代は食糧難、インフレで貧しく、和歌山から外へ出たのは大阪難波・心斎橋での買い物・映画と修学旅行で訪れた奈良の正倉院まででした。京都へ来たのは大学受験が初めてでした。美術研究サークルの指導教授はインド哲学の上野照夫[1]先生で、毎回のフィールドでの解説には実に魅せられました。もっと旅に出て建築や美術、未知の地域を巡りたいという衝動が溢れてきました。それまで閉じこもっていた反動でしょうか。

そうした活動を通じて建築や美術からそれらが鎮座まします地域へと関心が移り、やがて建築や住宅の街並みにもいざなわれて、大学院修士への進学段階になると、地域都市計画、各地の居住地計画をテーマとする西山夘三[2]助教授のゼミに入れてもらいました。国民のための住宅問題や都市づくりの調査と研究が大事だという問題意識とともに、このテーマなら各地への旅行の機会が多くなるぞという下心の

---

[1] 1907-1976　昭和時代の美術史学者。インド美術・ヒンズー教美術の研究で知られた。京都大学名誉教授。（デジタル版日本人名大辞典+Plus より）

[2] 1911-1994　住宅研究の第一人者で、古都の景観保存運動にも積極的にかかわった。京都大学名誉教授。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

方が大きかったかもしれません（笑）。

私が大学院に入ったのは 1957(昭和 32)年ですが、この時代の日本は戦後復興から国土開発の時代に入っていました。政府は国土における人口、産業、都市の配置構想を立てており、建築界もニュータウンや産業団地、区画整理など公共建築ブームでした。

都市・地域計画というと、それまで工学系では土木工学が主力でしたが、住宅団地やニュータウン建設など、建築学からの参画が増えたのもこの頃からです。「これは面白い」と、私は千里ニュータウン計画などに夢中で参加していました。

一方、観光地の美観やデザインという点に関しては目立ったテーマではありませんでしたが、西山先生をはじめ、建築や造園、土木や工芸などデザインの専門家が声をあげ始めていました。先生は「観光地にも関わらなくてはいけない」と戦前から主張されており、いくつかの府県や市の観光振興委員会のメンバーにも参加していました。西山研に入った当初の私は、そのことも知らずに、旅すること自体が嬉しくて「なんでもみてやろう」と先輩の調査のお伴や自費のローコストツアーに耽っていました。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

【観光との出会いはいつ、どこで・・】

●大学院でレクリエーションを学ぶ

当時の池田内閣が目指した理工学系の倍増構想に伴い、京大の建築学科も一学科増設することが決まりました。そこで地域都市計画部門としてできたのが「地域生活空間計画学講座」という長い名前の講座です。住環境、都市構成と移動、レクリエーション空間までと、非常に幅広い範囲をカバーする講座でした。土木学科にも既に都市計画の講座があったのですが、京大の土木と建築は反りが合いにくいところもありましたので、建築系らしいキャラクターでいこうということになったようです。住生活、生活様式等にかかわる研究をしていたので、講座にも「生活空間」という言葉が入っています。

ここで西山先生が重視したジャンルのひとつは、レクリエーションとその空間の課題でした。これはル・コルビュジェの影響を受けていると思います。ヨーロッパでは第一次世界大戦後、1920 年代に近代都市計画の動きが出て来て、住居と職場と余暇生活のための空間という 3 要素を近代交通システムで繋げば都市ができる、とコルビュジェなどが主張していました[3]。そのためには余暇生活研究も合わせて大切だということです。

西山先生の新しい講座では、住宅計画や都市開発論をメインに研究していましたが、私は西山先生から突然「お前はレクリエーションの研究をやれ」と言われました(笑)。特に観光空間に関するテーマを研究しろ、と。最初は「え？」と思ったけど「まあ、やりましょう」ということで始めましたが、当時は厚生省が健康白書とか余暇時間の保有について調べていたくらいで、レクリエーションについて教える先生もおらず、学べる環境もありませんでした。だから私は独学で旅行の民俗慣習や旅行風俗などの文系資料を学習していましたが、それだけではリアリティがありません。

そこで西山先生から 3,000 円くらいもらって、東京の官庁街を 5 日間かけて周り、余暇に関わりのある官庁や国鉄などのそれらしい機関をまわって資料を集めました。そこで、どういうことを今やっているか一通りつかんだことが後で役に立ちました。

労働と余暇などの社会経済論も参考にしました。余暇論というのは労働論と結び

---

[3] ル・コルビュジェ　1887 - 1965. スイス生れパリ育ちの建築・都市計画家。複雑に入り組んだヨーロッパの伝統都市を否定して、緑のオープンスペース（戸外レクリ空間含む）で囲まれた超高層の住宅街やオフイス街に再開発することを提案した。このような都市機能の分離と交通手段による結合は近代機能主義＝funtionalismとして世界に影響をあたえた。1922『300万人の現代都市』（パリ）、1930『輝く都市』1933『アテネ憲章』（近代建築国際会議、中心リーダー）。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

ついて、一つの論拠があるんです。労働は心身を消耗させる。それを余暇時間に休養して労働力を再び回復させる（Re-Create）」ということがもともとの意味でしたが、さらに自由時間として気晴らしや健康増進などの機会とみる。つまり、レクリエーションに対する考え方としては当時、消極派、体力回復派、人間形成派の三派に分かれていました。西山先生は人間形成派で、余暇生活とは積極的に人間の暮らしの領域を広げ、能力を展開する場でなければいけない、と主張していました。私もその考えに賛同して、そっちの方向でやってきました。

「建築学教室の職場で働くようになってからは、まず、人間の生活の場としての都市計画のための基礎を目指した。住宅や生活施設の建築計画学は当時でもかなり進んでいたので、私は、公園緑地やレクリエーション空間を対象にして、それを生活論、生活様式論からスタートした。（中略）これには恩師西山夘三先生の生活空間論や当時刊行された資源論や、環境破壊を考える上で災害論から大きな示唆を得た。一方では観光資本による国土や資本の先取りと破壊がいっそう激しくなっていて、本当の研究はこれからである。」（「都市計画研究の十年」より）

●城崎温泉で観光開発の現場にふれる

1959(昭和 34)年の秋、兵庫県の城崎温泉街から 20 分くらい北側の日和山海岸地区で小さな旅館を経営しているご主人から西山先生に「ひと回り大きな観光開発をしたいので計画案を描いてほしい」と相談がありました。兵庫県下では西山先生はよく知られていました。先生は兵庫県の観光関係の委員をしたり、姫路城の入り口広場にある迎賓館を設計したりしていました。迎賓館は木造本格和風で豪快さを感じさせる先生の数少ない建築作品の一つです（現存）。また、城崎町ではまち並み風景から見ても大切な外湯めぐりの各温泉の改築や新築の設計を指導していました。一番目立つコーナーの地蔵湯は和風とコルビュジェ風が混ざった、何ともへんてこなデザインでしたね（笑）。

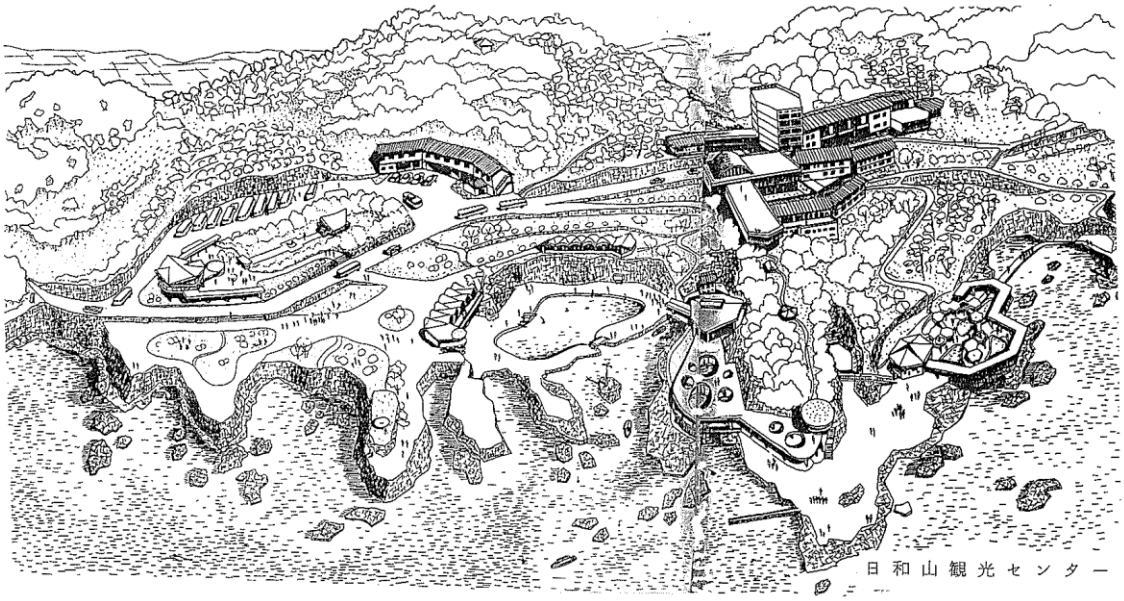
その建物や地元の老舗旅館の改造で西山先生は城崎温泉でも有名になり、声がかかったんです。ところが、先生は忙しいので「お前行って聞いてこい」と言われ、私が現地に行くことになりました。25 歳、修士 2 年の大学院生が 1 人でやってきたので、先方さんもさぞ面食らっただろうと思いますが、1 週間住み込んで現地観察と要望のヒアリングをして計画条件の整理をしました。2 回目の訪問では開発スケッチを持参してより具体的に磯遊びの場を考えてデザインしました。

相談を依頼されたご主人は、地元で魚の行商を永年続けて財を成して実業家に成長した方と聞きました。地元の様々なこと、例えば地形や海の様子などもよく知っていて、磯を使ってどういう遊びができ得るか、また来客が楽しく過ごす様子などかなり明確なイメージを育んでおられました。例えば浦島太郎の物語をベースに、自然を大切にしながら磯遊びや釣り堀などが楽しめる海岸遊園を作りたいという腹案がしっかり出来上がっていました。面白い方でしたね。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

そのアイデアを私が聞き取り、対話を通じて自然景観・造園・レクリエーションの空間的利用の分析を加えたスケッチをレポートとして提出したら、この原案がかなり採用された様子です。

一昨年孫達を連れて訪れてみたら、驚いたことに約 50 年間存続していたんです。過大に開発せず、中規模で自然も残し、周囲の一帯と調和していました。これが、私の観光事業とのお付き合いの始まりです。



三村先生によるスケッチ（1959 年）

当時、民間でレクリエーションの専門家も観光地コンサルタントもまだ稀だった時代でした。後になると民間コンサルタントとか電鉄資本などが開発プランをもって進出してきます。開発の審査でも、たとえば山陰海岸国定公園の指定は、それから 4 年後でしたから自然保護関係のチェックはありませんでした。

歴史保存などがテーマですと著名な先生方からのチェックを受けて、間違ったことをいうとすぐ指摘されるけど、観光については正解がなかったのか、間違っているという人はいませんでした。世間知らずの若者でも役に立てたのは，この当主のように、地元のことをよく知り地道に考えながら観光地づくりを進めてきた人がいたからです。各地でのそういう先駆者たちの仕事振りや業績のことをもっと明らかにしておきたいものです。

「みんなが楽しく海と語り、波とたわむれるこの舞台装置はまだ第一幕のためのものに過ぎないが、舞台は主役を演じる観光客とともに発展するものであり、私たちの観光地計画も続けて発展させたい」（「建築と社会」昭和 34 年 7 月より）

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

2. 観光における取り組み
【観光分野で何をやってきたのか】

●過密・通過型レジャーへの疑問

大学院を出た後は大阪府の技師として就職し、千里ニュータウンの設計に３年間従事しましたが、1960(昭和 35)年に西山先生から新しい講座の助手として呼んでもらえました。

この頃は高度経済成長期で全国総合開発の時代とあって、東京オリンピックや万博の開催、新幹線や高速道路の建設などで急激な都市化が進みました。所得倍増、余暇時間微増でしたが、都市化によって集中した人口が休養レクリエーション空間に殺到した時代でもあります。

この現象は、大衆レジャー＝マスレジャー時代の到来と呼ばれていました。私は、このマスレジャーの実態とそのためのアウトドア・レクリエーション空間の確保を観光研究のテーマとしていました。

当時はどこもかしこも混んでいて、遊園地なども人で溢れていました。琵琶湖のそばにあった「紅葉パラダイス」（2016 年 3 月に跡地に立つ巨大マンション団地売り出しがはじまった。）などの「ヘルスセンター」と呼ばれる施設が人気で、大浴場やプールに入ったりショー宴会を楽しみバスで帰ってくるといったレジャーが盛んでした。マイカードライブが流行る少し前で、大型観光バス時代の到来です。

京都市内では東山から北上して、大文字山のふもとに建設するゴルフ場を経由して比叡山まで走らせる東山ドライブウェイを建設しようという計画がありました。さすがにこの案はつぶれましたけどね。まさに当時のレジャーは過密、雑踏、通過型でしたね。その頃から、私はそういうのは過渡期にしたいと思っていました。

●オランダ視察と琵琶湖の「湖岸公園化構想」

1960 年にオランダを訪問することになりました。当時、日本政府は国土開発のため国連からの基金導入をはかっていました。京阪神大都市圏の整備もそのプロジェクトのひとつでした。その予備調査の主査として来日したのが、オランダ社会計画研究所（ISS）のタイセイ・J・P 教授でした。彼は ISS の理事で、有名なオランダ中部大都市圏構想を実現させたプランナーでした。アムステルダム、ロッテルダム、ハーグ、ユトレヒトなどの都市が国土の中央の低地帯を囲んでイヤリングの珠の様に並んでいます。新しい人口や産業を受け入れ発展するのには低地を開発するのが安易であるのに、環状ベルト内のきめ細かい開発でコンパクトなまちをつくり、真ん中エリアは農業、戸外レクリエーション、自然保護、風土景観など多様な意味を持つ緑地ゾーンとして育てることにしたのです。

タイセイ教授は、京阪神も自然特性や歴史からして、それぞれが特色をもっている都市連坦地域の例であるとして大変に興味をしめされ、毎年彼がオランダの研究所でやっている「総合計画」（Comprehensive　Planning）専門家研修コースのテ

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

ーマにこの素材をとりあげることにされました。おかげで、日本からも数人が資料持参と説明、共同討論の助っ人として招かれたのです。

初めての海外、各国の専門家との応対は大変でしたが、各地域の視察や行政訪問で、この国の空間計画の政策や保全の様子を確かめてみたり資料を収集することができました。

オランダは国土計画を国が全部行い、緑地計画がすごく系統だっています。よその国の国土は神が造ったが、オランダはオランダ人が造った
というだけあって、大小多数の水路も両側がオープンスペースとして開放されています。そういう風にスペースをきちんと系統立てて確保するという取り組みに感心して帰国しました。

帰国後、1970 年代に入ると、琵琶湖では京阪神の水需要の増加に対応するため、「近畿の水がめ」として、湖岸に堤防を築いてダム化する計画が総合開発の名の下で進んでいました。並行して、湖畔の埋め立てや切り売りなどの乱開発が進行していました。私はその頃、京大の助教授になっており、対抗案として自分の研究室で大津市域について「浜大津地区における湖辺空間の現状と問題点」という報告を自前で発表しました。市民や行政もみたいというので、市に印刷してもらいました。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

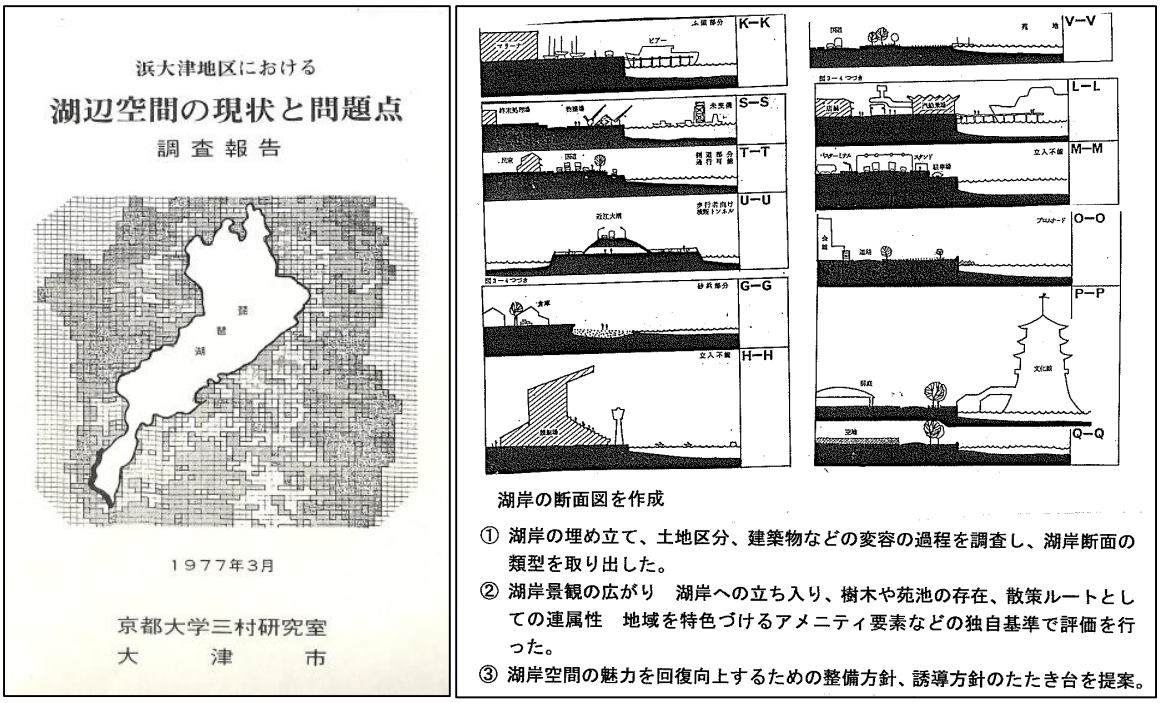


図　浜大津地区における湖辺空間の現状と問題点
（大津市は三村研究室の調査報告を貴重な資料として、研究室の厚意を得て複製して活用することとした）

すると、琵琶湖国定公園管理のために国から県の自然保護課へ出向していたスタッフから電話があり「乱開発が進む琵琶湖全域についても同じように提案ができないか」と言われたのです。

丁度この時期、京大理学部の先生達を中心とした琵琶湖総合開発問題研究会が琵琶湖開発に批判的な調査活動を開始していました。私はこの会のメンバーから湖岸の生物学や生態学、保存のあり方について助言を受けることができて、利用と保全の地域類型パターンをデザインしました。

こうした助言はとても役に立ちましたね。例えば、葦のある湖岸の生態は大切だから埋め立ててはいけないとか、内水路や内湖の意味などについてです。そういう要素を入れ、県への報告書としてものすごい勢いで「琵琶湖岸公園化構想」を作り上げました。かなり粗い仕事でした。

この案がその後どれだけ役立ったかはわかりませんが、琵琶湖の水質や生態を守る運動でも、湖岸の景観とアメニティを一体的にイメージできる視覚的効果をモデル化しておくことはそれなりに有効だったと自負しています。

それまでも、せっけんで水を汚してはいけないとか、水をたくさん取り過ぎるなといった意見が多々ありました。そういう意見と、湖岸を維持していこうとする形

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

態的なイメージとが運動を通じて一致していくと、形あるものとして理解できるようになりますね。そういう湖岸の姿を描き出せたというのは意義があったと思います。

この計画を見て、海岸防災協会という非常に権威ある団体からも原稿を書いてくれと言われ、寄稿しました。この時期、ヨーロッパのウォーターフロントの開発計画が出てきますが、あれは港湾・工業地帯を利用して都市の活性化を図ろうというもので、評価も賑やかさの要素が大きいと思います。

●水辺空間の重要性に着目

その後も、地域計画の調査では水辺と人々の暮らしに着目する機会がありました。たとえば、伊勢河崎では歴史的町並みの調査を行いました。伊勢河崎はかつて伊勢詣での人達が三河の方から上陸する地点で、川の両側にぴっしりと町家がはりついている町です。しかし、上流丘陵の宅地スプロール開発によって大水害が起きたので、川筋両側の町並みを全部取り除いて、河川の幅を広げるという計画案が出てきました。途方もない大事業なのですが、その上にそんなことをしたら歴史上由緒ある町並みが消滅してしまうということで、ナショナルトラストから助成を受けて「戦闘的調査団」を組みました。そういう問題事例と戦い、お役所と喧嘩するほうが調査員も元気が出ますね（笑）。西山先生仕込みですね。西山先生は反権力、矛盾論から構想を立てる先生ですから。京都タワーにもアゲインストでしたからね。

三村研は上海の同済大学の歴史文化都市研究センターと研究交流があり、大学院留学生も受け入れていたので、江南六鎮といわれる蘇州や周荘などの水郷集落も調査しましたが、ここも開発と保全のはざまにあってセンター長の阮儀三先生は乱開発と闘っておられます。

もう一つは、長崎市の中心地を流れる中島川の大水害で眼鏡橋が流れてしまったことです。これも上流の宅地開発スプロールが原因なのに、あたかも石橋の断面が流れの邪魔をしたという言いがかりをつけられました。そこで川幅を 2 倍以上にひろげてメタルの欄干をつけた現代デザインの橋に置き換えようという案が出てきました。この時も日本ナショナルトラストの支援を受けて西山先生と現地へいって議論しました。その結果見かけの川幅は前と同じにして、両側の細い街路と宅地部分の地下に洪水時のバイパス水路を作るとどうかというわけです。結果的にこの私の案が採用になり眼鏡橋も復元されました。なんと、住民も石造アーチ橋のピースが残っていないか河口まで探しにいって、拾って来ていたんですよ(笑)。これは成功した事例だと思っていたら、当時、長崎総合科学大学の教授で、中島川を守る会の事務局長であった片寄俊秀さんからは、眼鏡橋が復元できてよかったが、バイパス水路の地上に整備した道路が広くなりすぎて風情がなくなったと苦情をのべられました。橋のことだけでなく、町並み景観全体として取り組む提案であるべきでした。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

図　復旧中の眼鏡橋と川床清掃の市民（イメージ図、1983 年）

その後、北米のサンベルト地域開発調査団長としてテキサス州のサンアントニオに立ち寄ったことがあります。市内をアントニオ川の支流が運河のように折れ曲がりながら流れていて、両岸がリバーウォーク＝散歩道になっています。メキシコ国境に近く、全米有数の観光都市です。ひととおり観光してバスに乗り込む前に、近くにあった本屋さんで「サンアントニオ水都物語」の原本を見つけました。この町でもかつて大水害があって、市内の運河を全部埋め立てて、下水道と道路にするという計画がありました。それに対して建築家のロバート・ハグマン氏が市民と市議会に働きかけ、生涯をかけてリバーウォーク散歩道を守った物語です。柳川掘割物語と広松伝[4]氏の生涯とを重ね学ぶことができました。ツアー参加者が協力して「サンアントニオ水都物語」というタイトルで 1990 年に翻訳書を出版しました。

[4] 広松伝（ひろまつつたえ）1937-2004　柳川市職員として掘割の埋め立て計画に反対し、浄化運動に取り組んだ。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

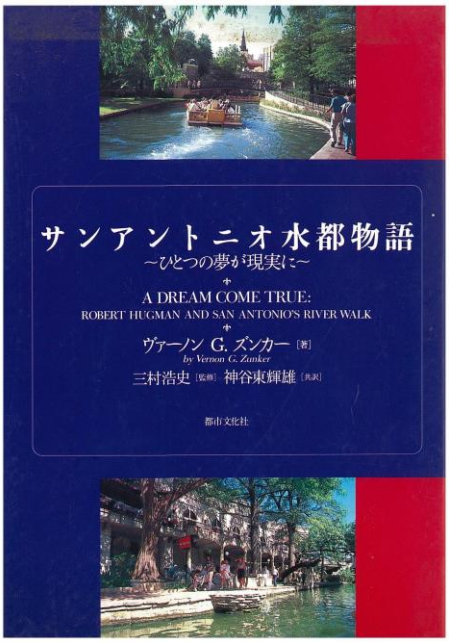


図　サンアントニオ水都物語（表紙）

このように、水との関わりから土地を見ることはとても大事だと、最近の災害などを見ても思います。 陸地だけから考えないということですね。大体、歴史は陸地に住んでいる人が書いていますよね。海賊は歴史をあまり書いていないのでは･･･？

ただ、水からみる都市計画というのも限界があります。事例でこういうことをやったと言っていても、理論化できていない。河川工学や港湾工学ともっと仲良くしておけばいいのですが、学際的研究体制を組めなかったことが反省点と言えるでしょうね。

地域の調査研究については、関連する分野の人達との交流、学際的研究チームの形成が大事だと学びました。そんなことも思いながら「地域の空間資源論」として原稿にまとめ、「新建築」という雑誌で 2 回ほど掲載しました。

●竹富島との出合い

沖縄県が日本の行政に復帰する前の 1969(昭和 44)年頃、日本観光協会(当時)の観光診断の仕事で沖縄県に行きました（復帰後の振興策を立てることが仕事でした)。沖縄に行くのはその時が初めてでした。最初に行ったのは宮古島です。なかなかいいところでしたね。行ってみないとわからないところがあるなと思いました。町長さんが先頭になって鍾乳洞を案内してくださり、地質・地形・地下水脈と暮らしの結びつきから学べました。ついでに「沖縄で本格的な町並み保存をしているところはどこか」と尋ねましたら、竹富島だと言われ、予定を変更して竹富島に行きました。石垣島から夕方の船で着き、月明かりの下を、翌朝は夜明け前から歩き回って、

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

朝一番の船で帰るというせわしない訪問でしたが、確信は深まりました。まことに素晴らしいところでした。沖縄の多くの地域では戦火や戦後開発によって消失した町並みも多いのですが、ここはちゃんと残っていました。沖縄の中で、この島の伝統的家屋と集落の町並みが一番品性・風格をよく保っているのではないかと直感しました。

竹富島にはかけがえのない美しい町並みが残っている。この町並みを記録して成立過程の説明を加え、紹介したいと考えました。幸いに観光資源保護財団(日本ナショナルトラスト)の調査に採択されました。西山先生と私の研究室と OB で 6～7 人で島に出向き、町並み保全の調査に取りかかりました。

事前にきちんと挨拶をしておかなかったので、見慣れない男たちの集団を見て地元の人達からは、「あなた方は何のために来たのか」といぶかしく思われることもありました。最初は町並み保存のことはあまり考えていなかったですが、調査を通じて交流が深まるにつれ、町並みが危機にあること、その保存問題を抜きに調査などしておられないことが分かってきました。

この頃、島では土地の買い占めが進んでいました。島の人口は 500 人で、これまでは「ウツグミ」という共同体運営の伝統があり、村の自治制を守ってきました。しかし、島のリーダー達の話によると、いつのまにか島の大部分が外から来たブローカーによって買いたたかれ、買い占められているということでした。あるリーダーが話してくれたのは、ふろしきで顔を隠して家の前を通る近所のおばあちゃんを呼びとどめて聞くと「私の土地を買ってくれた人へのお礼にうちの鶏が生んだ卵を持っていくんだ」と。みんな知らぬ間に土地の買占めが進行している。おばあさんは土地に初めて値がついて売れるなんてと喜んでいる。そういう状況のもとで、島民の結束を無視する乱開発はやらせない、島の環境と運営秩序は守るというのが、リーダーたちの基本姿勢でした。

私たちもまた民家・町並みの特性調査だけでなく土地問題を含めたしまの保存方針のコメント付きの報告書を 1974(昭和 49)年に作成して公民館で発表しました。文化庁の伝統的建造物群保存地区の制度(伝建制度)ができたのはその翌年の 1975(昭和 50)年です。非常にタイミングがよかったですね。 こうした経験を通じて、伝統的な町並み保存と自主的な地域運営を維持することは、島の運営で共通するテーマになりうるということがわかって来ました。

竹富島は 1987 年に伝建地区になりました。その時は全国町並み保存連盟の全国集会を開催しました。夕焼けの空に描かれた西表島のシルエットを背景にしてコンドイ浜で開かれたパーティの感動は忘れられません。及ばずながら私も応援団員になって竹富島を支援しようと、私はそれからも竹富島伝建審議会長を務めるなど、40 年間ずっとお付き合いさせてもらっています。

今もまた、竹富島では大きな問題が起きています。新しく石垣空港ができて観光客が急増しています。嬉しいことなのですが、石垣島から近いので竹富島のコンドイ浜という神聖地へ水泳客が押し寄せています。それを契機として、一大リゾートを作る計画が持ち上がっているそうです。どうすれば八重山の中でもシンボルスポ

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

ットであるこの地の環境を守れるのかと審議会や町、住民と開発企業との協議が進行中です。

竹富島の環境保全
と将来の方向

竹富島の魅力　竹富島が小さな美しい自然を持った島であることが、観光するものにとって、まず胸をときめかす状況をつくる。白砂のしきつめられた石垣の通りを持つ集落の景観は、ここはたんなるありきたりの島ではないという第一印象を与える。民宿の親切さ、ミンサー織などの伝統工芸、ゆたかな民謡、芸能の数々に触れると、この地域社会の持つすぐれた特質が伝わってくる。そして、過疎の島とは聞いていたが、若い世代や子供たちもいて、老人たちも何かと民宿や織物や島の仕事に生き生きとはげんでいる姿をみると、この島の持つ明るさの根源がわかる気がする。

竹富島は決して静止した観光集落ではない。

竹富島の活力　この島の将来を考えるにあたって、まず念頭におくべきは、島の人々のもつ自治と暮しの活力であろうし、その背景としての歴史的伝統であろう。観光客の無放図な振舞いを規制し、民宿を成立発展させてきたのも、衰微していた民芸を復活再興したのも、困難な時代を通じて、種子取祭をまもり育ててきたのも、いったんは流出した若者をUターンさせるだけの魅力をもちつづけてきたのも、すべて島の人々の共同の努力によるもので、そのことが今日の竹富島の明るさと活気となってあらわれている。

あまりにも多くの観光地が俗化・陳腐化してきた道なのである。自主的な観光経営の活力をもつ竹富島でも、そうはならないという保証はまだない。

自主開発のおとし穴　竹富島のようにすぐれた資源をもつところは、宣伝をしなくても、観光客は来る。ところが、客に合わせた観光開発を「自主的」におこなってゆくとどうなるか。

民宿のいくつかは、より大型のホテルや旅館に成長して、島外からも従業員を雇わねばならなくなるだろう。借金で建てたホテルや旅館の償還をしてゆくためには、いよいよ大量の観光客を受け入れることに迫まられる。島のなかでの貧富や雇用主と雇用者の格差が大きくなるし、島外から働きに来る流入人口もふえてゆく、祭りが観光化すると、島の人たちも、あほらしくなってやる気がおこらない。これは竹富島をささえてきた共同体にとっての大きな危機である。

開発と観光客の激増による竹富島の魅力の低下がはじまり、異常気象とか景気の変動がつづいたりすると、借金の返済に困って、倒産や廃業などが生じるおそれがあることは、すでに各地の民宿成長地帯での事例からみても予想される。これで土地や建物が島外の人手に渡ってしまい、共同体が崩壊するとすれば、結果は島外資本の観光開発

図　竹富島の環境保全と将来の方向（三村研究室編集　1976 年）

人が住まい育てるところの清らかさという忘れていた環状を甦せてくれたのは、1969 年、復帰 2 年前のこの島へのはじめての訪問であった。（「竹富島の民家と集落」より）

●伝統的な町並み保全と「内発的開発」

1970 年代になると工業施設と公共施設の集積が進む一方、農山村は地域格差を訴えるようになりました。過疎対策事業の柱として打ち出されたのが、大資本と公共事業によるリゾート開発です。ゴルフ場や別荘地の開発分譲、マリーナなどの大型施設が次々と計画されました。

しかし日本では別荘を持ってゴルフをやって、ヨットに乗ってという階級はほんの一部で、地元はもともと民宿、釣り船などで細々と稼いでいたわけでしょう。それを無視した、何十 ha という別荘地開発が上からふってきたわけです。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

竹富島の例もそうですが、余剰資金を使った投機的投資として、土地の買い占めが広がったのもこの頃からです。私も各地の状況調査に行きましたが、住民も自治体も大規模プロジェクトがくれば「交通が便利になる」「雇用が増える」と期待していましたが、結局は日本の大衆的なレジャー需要には合わず、今では宙に浮いているプロジェクトが少なくありません。

私も観光専門家ということで、四国のある町の海浜リゾートセンターの計画委員会に参加したことがあります。伊勢海老がよく獲れるという磯浜がある湾を大量の砂で埋め立てて、ビーチタウンを開発するという内容でした。

県庁での報告会が終わった後、一人の担当職員が私に近づいてきて「先生は、本当にこのプロジェクトを進めるべきだと思いますか」と質問されましてね。狼狽して答えに窮し「こういう案もあるが、今実行するのは次期尚早だ」などと、しどろもどろに言った記憶があります。海洋生態学者や地元の住民、漁民も不在のままの委員会に無条件で参加したことが悔やまれた一件でした。

当時、こうしたリゾート計画は大規模コンビナート開発になぞらえて、「煙の出ない産業開発」と言われていました。買い占めた土地がたくさんあるから民間事業も公共事業も開発したいが、工業地帯開発などの手法しか知らない。だから、地元でやっている磯釣りとか民宿やみかん狩りなどを完全に無視して、観光についても大規模開発を、となってしまったわけです。

そういう状況への批判から「内発的開発」という言葉が住民の間から出てくるわけです。地域のことは自分たちで仕事起こしをやらなければならないということで、これは大企業などによる「外発的開発」を見たから出て来た言葉でしょうね。大分県の「一村一品運動」などもこの流れにあったと思います。

1970 年代はちょうど、戦後生まれが成人になった頃で、彼らは田舎のことを知らないんですね。姉さん被り野良着のおばさんに、都会から観光でやって来た女の子が出会って無邪気にＶサインしている写真が載った国鉄の「ディスカバージャパン」のポスターがヒットした時代です。全国町並み保存連盟ができたのもこの頃ですね。

小京都という言葉が生まれたのもこの頃で、妻籠などの古い町並みが注目され、そういうことが伝建制度の誕生に繋がってくるわけです。町並み保存については、津和野や妻籠、名古屋の有松など何か所か有名な先達があります。

私は伝建の専門委員を１度務めましたが、伝建制度が検討された経緯については、中央政府には関わっていないのであまり知らないです。避けた訳ではないですが、お呼びがかからないですね(笑)。

しかし今では、文化財保存の制度だけで良いのか、という問題が出て来ています。伝建制度を作った頃から 40 数年も経つと、地元世代も代が替わり、生活も変わり、観光客の欲求も変わってきていますから。持続的にやっていくにはどうするのかと。そこで、観光地の持続的な開発運営ということに気付き始めたのです。そこに、送り出す地域と受け入れ地域という話が登場してくるわけです。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

地域社会が、観光客を迎えて、よく来てくれました、まず私たちの誇りにしている地域を見て下さいと自負し、逆に、地域社会を損傷するような観光行為に対しては、きびしくこれを律するくらいの観光地域こそ素晴らしい。（「地域社会と観光資源―受け入れ側からの視点」より）

3.「観光」に対する失敗と反省
【わが国の観光政策は有効に機能してきたか】

●「ホスト」と「ゲスト」の関係に着目

1975(昭和 48)年頃、地中海のキプロス出身で、英国で地理学を学んだロシディス・ニコスという研究者が、三村研究室に所属する博士コースの留学生となりました。彼は、私のところで学位論文を書いたのですが、「観光活動＝ツーリズム」は世界各地にわたる大きな活動であり、地域づくりでも大きな影響力を持つようになっていることに注目していました。

しかし、観光という現象は地域政策や産業政策ではまだ十分な地位を与えられず、政策立案や研究開発も観光客を誘致するための振興策にとどまっています。どんな研究の立ち上げが必要かと議論していたら、彼が持参した文献の中からアメリカの文化人類学会の人達が書いた「ホストとゲスト」という本が面白いと言って、紹介してくれました。観光活動ということを受け入れる側（＝ホスト）、訪れる側（＝ゲスト）の両面から見て、それぞれがどんな風に対応して、人類学でいう文化的変容を来しているか、世界の各地で事例研究したものです。

この時代、金持ちになったアメリカ中産階級は大型ジェット旅客機とホテルチェーンを利用して世界に出かけました。これがグローバルなマス・ツーリズムのはじまりで、やがて他の先進国も参入しました。その行き先の多くは発展途上地域や昔ながらの農山村地域でしたから、さまざまな軋轢が生じます。たとえば、外部からの資本によるゴルフ場、別荘地、マリーナ開発にともなう自然環境や聖地への影響などです。

この本では、需要発生と受け入れ、観光事業者、旅行商品の設計、観光圧力の効果とマイナスの影響など世界数十地区でケーススタディを行い、受け入れる側と訪れる側、両者の関係をチャート化したんですね。年に一度の神聖な年中行事・芸能までを毎夕ホテルのショー仕立てにするとか、伝統のお祭りが混雑するので観光客用と住民用の祭りに分けたら片方がつぶれたとか、伝統工芸があるのに安物まがいスーベニールの流入とか、先住民族観光と銘打った集落見物などいろいろな事例を調べています。ホストとゲストが対等に敬意をもって交流できない実情を調べて、あるレポーターは、このやり方を植民地主義的観光と決めつけていたくらいです。

私は文化人類学者ではないのですが、内発的開発を考える点から興味を持って通読し、さらに一歩踏み込んでその本の日本語訳書を出版しました。日本の文化人類学者の人達はご不満でしたよ。専門用語で間違ったところがあるとか、畑違いの連

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

中がこの分野で注目されている本を訳したのは気に入らないとかね。でも新しい問題提起はできましたね。観光客を送り込む人、あるいは受け入れる人はどういう相対的関係を取り結ぶべきか、などのテーマが明らかになってきたわけです。

受け入れる側はホストだから「よく来てくれたね、ゆっくり見ていってくれ」としなければいけないけど、消費者は王様だと言ってゲストサイドがいばりちらすことが多い。そういう差別的、いわば植民地的な観光開発の問題に対して文化の対応はどうすべきかと提起したわけです

ニコス君はこの本に提起されているテーマを基調に、島でやった方が、モデルがはっきりしやすいだろうということで、ハワイ、沖縄、キプロスの島嶼地域を対象にした地域開発効果を評価するモデルを作成し、学位論文として提出しました。データをきっちり集めて、項目としてはかなり精密に書いてありました。

一方で住民が観光の在り方に積極的に関わるようになったり、応援団なども出て来ました。

私はその後も講演会や審議会で、この本に書かれたことを引用して話をしてきましたが、この時の経験を通じて、我が国では観光政策や、観光地づくりの評価についての本格的研究はこれからだと痛感した次第です。

図　「ホスト＆ゲスト　観光・リゾート開発の人類学」1989 年

（中略）私たちが入手した洋書のなかで注目された 1 冊の本が、「ホスト＆ゲスト－観光活動の人類学的考察」、つまり本書の初版であった。その後の私たちの観光地域計画に関わる研究に適用してみたところ、この主客理論は、経済市場では需要と供給とされる競合の関係を、訪問者側と受け入れ主人側の人間交流を原点とする関係としてとらえたもので、思想としても実践理論としてもすぐれていることが分かった。（「ホスト＆ゲスト　観光・リゾート開発の人類学」監訳者あとがきより）

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

4. これからの「観光」・「観光地づくり」・「観光計画」への提言

【これからのわが国の観光、観光地づくりに必要なことは何か】

●研究アプローチを振りかえってみて

私は、生活空間計画としてレクリ―ション地域、とくにオープンスペース利用とその配置計画からはじめました。過密で閉鎖的な都市空間に開放性、快適性、戸外活動の機会を確保することは近代都市計画の条件の基本だと思っていました。ところが、実際に各地を訪れてみるとそれぞれの地形や気候が違う、景色も、吹いている風にも味わいがある。まして観光地といわれる生活空間では地域の味わいを演出することが大切だということに気が付きました。そこで、昔からの旅行案内や景色由来などをみていると、名所、景勝地、史跡、八景などの由緒、あるいは浜、川や湖、城と町、台地、渓地、岬と島嶼などに住み着いてきた人々が愛着をもって名づけ、大切にしてきた土地柄も含めて考えたいと思うようになりました。

オランダの広大な緑地でも海抜ゼロメートル地帯を干拓して水路網と風車でシンボライズされる村落を築いてきたヒストリーがいっぱいです。琵琶湖の湖岸公園化調査を始めたときは、公開緑地の保存調査で目いっぱいでしたが、しだいに湖岸の景観、漢詩由来の琵琶湖八景の現地確認などをと思うようになりました。何が人々を観光客としてそれぞれのご当地に引き付けるのか。その土地でなければ体験できないような特色とはどうセッティングされるのか。景勝（名勝）、史跡、名所、名所、・・・など、これらは建築家が創設するものではありません。自然の地形や気象、村や町の定住、信仰、芸能、地場産業、名物、そして温泉、それらは何世紀もかけて注目され尊敬され語られてきたものです。昔話が脚色され物語や地域づくりが歴史にまで広がってきたのは人々の執着で、これを観光客誘致の資源としてきたのです。宗教町、温泉町、春秋の行楽地、島や半島など、日本の国土はきめ細かくそれぞれにユニークな地域形成を現代に伝えており、それを観光資源にすることで集客効果が得られてきたのです。あちこち旅行してこのことが分かってくると、時代嗜好もありますが、何が観光客誘致の資源となるのか、まだまだ発見、再発見する潜在資源がいっぱいあることが想像できます。現代の名所づくりはいかになされているでしょうか。

●伝統的町並みの観光資源価値

新しい価値の再発見・継承について私にとって最大の体験は、「伝統的町並み」「歴史市街地」への関心の高まりでした。1970 年代に成人した世代の多くは、大都市の団地で育ってきたので、旅に出る田舎の風景は感激的だったと言えます。これをＪＲが「ディスカバージャパン」という旅行需要キャンペーンに言い当てたのは

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

優れた企画だったと言えます。民家建築の造形はよく学んできたのですが、伝統的町並みが保有しているのは建築物単体だけでなく、そこで営まれてきた生活文化を内包するものであり、民俗や年中行事、仕事体験などと一体として演出されることで価値が浮かび上がるのです。この経験は、観光のテーマだけでなく、1980 年代頃に伝統の家屋と現代の家族の暮らしやまちなかの中小企業の仕事をふくむ都市計画デザイン全般の方針としても大切だと考えるようになりました。古くなったストックをスクラップしてピカピカの建造物にしてしまうよりは、活かせる中古ストックはリノベーションし、新しいものはそれとアンサンブルするか対置するか何らかの関係を持たせて作る方が地域の時間を感じさせると思います。

この時期に重要なテーマが次々と出てきました。それらがまさに破壊され失われようとしていました。私がかかわったのは、河川上流の乱開発に起因した水害からの対策としての河川拡幅の犠牲になろうとしていた伊勢河崎のまち並みや長崎の眼鏡橋。琵琶湖総合開発にともなう湖岸環境の破壊、さらに復帰にともなう本土からの土地買占めとたたかっていた沖縄竹富島があります。さらにもう 1 件、大阪の中之島一帯の高層化プランで失われようとしていた市公会堂・府立図書館・市役所・日銀大阪支店の近代建築資産群の保存運動があります。

●都市のシンボル　大阪中之島を守る会への参画

中之島で参加した取り組みは、1971 年の「日本建築学会近畿支部」が市に提出した保存要望書にはじまり、建築家や市民有志による「中之島を守る会」の粘り強いキャンペーンによって、やがて市民がうねりのように参加する「中之島まつり」へと盛り上がりをみせました。

結果としては、文化財指定、耐震補強と改修、大阪近代の由緒を大切にするデザインが実現できました。私は学会のメンバーとして参加していました。相手方との交渉にもいきました。大阪市役所に抗議に出かけたときは、正面の営繕課長が京大出身だったので、帰り際「私の授業の単位は取っていましたね？」と、つい余計な念押しをしてしまいました（笑）。また、保存要望書を提出していた日銀からの応対も得られませんでしたので、建築学会近畿支部としては、大阪市民の盛り上がりをバックに本店に直訴することにしました。単なる要望文書ではなく、現本館を保存活用するとともに西側の予備地に内庭をへだてて新館を新設してはというアイデアプランを持参しました。前日から夜を徹して設計図にまとめました。その後の扱いはわかりません。いまでは本館は保存され、内庭と西側の新館が新設されました。新館は中之島の場所性と歴史的様式と調和しつつ現代デザインにとりくんだ名建築として現出しています。私たちのアイデアプランに日銀からの設計料は頂いていませんが（笑）、まちづくりにおけるいろいろな要望ベクトルをイメージとして合成して説明する手法が役だったのかなという自己満足が残っています。

1970 年当時、中之島一帯の流れはドス黒く濁り悪臭が漂っていました。地盤沈下対策として水辺はコンクリート護岸で固められていました。大阪近代のシンボル

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

建築群の保存にあたって中之島祭りが組織され、その市民体験が、同時に水辺や公園環境のアメニティ回復を誘発し、さらに今日の「水都フェスティバル」の賑わいのような大阪の新名所づくりにつながったわけです。関わった多くの市民がその場所性に気づき、ゲストとしても自覚を高めたのは大きな成果だったといえるでしょう。

なお、新規の投資がすべて都市景観を破壊するとは断定できませんね。たとえばエッフェル塔と京都タワーですが、建設時は猛反対を食らいました。でも今日では都市のランドマークとして承認されています。それ自体の時代をシンボルとして表現するデザイン、都市の軸線にのっている位置が馴染まれてきたものです。それが場所のシンボル性というものでしょう。

ここまでが、空間計画に関わってきた私の体験です。
ホストとゲスト、どちらかといえば受け入れ地域の特色やサービスで観光客を誘いもてなすサイドへの関わりであります。生活空間計画学という私の学問ジャンルから展開してきました。

京都の都市景観や京町家の保存計画については、改めて述べる機会を持ちたいと思います。

左図：「中之島　よみがえれ　わが都市」まもる会 1974 年
右図：「中之島・公会堂　蘇る都市の鼓動」大阪都市環境会議（高田　昇　監修）1990 年

●観光旅行を設計する、企画する

話は飛躍しますが、私が紹介したホスト＆ゲスト論では、観光客を客として迎えるホスト＝もてなし手、ゲスト＝迎えられる客という関係がありました。ここに観

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

光地という地域の広がりを持ち込むと、交通や宿泊事業体だけでなく住民や自治体も広い意味のホストになります。たとえば景観や歴史記念物、年中行事や名物などの維持運営などいろいろです。ゲストは誰に迎えられるのかというと、マスな観光産業と強く連携しているところもあれば、地元依存という場合もあるでしょう（東京ディズニーリゾートクラスの大規模で主張のハッキリした施設ではホストもゲストも明快ですね)。

これからの観光を考える場合の課題の一つは、「自分の観光の内容を誰が設計デザインするか」であろうという点です。かつてのような寺社参詣、季節行楽、温泉休養など旅の類型が幾つかであった場合と違って、現在はゲスト（観光客）の方の趣向も行き先も楽しみ方も多様化しつつあります。また、マス・ツーリズム団体時代と違って小規模グループ化しています。またホスト側も、これまでの通り一遍のガイドにとどまらない、特定のテーマについての街歩きやモノづくり体験などメニューを増やしてきています。

トラベルの語源にはトラブルなど労苦の意味も込められていたようですが、こんな一節を読んだことがあります。「対象から隔離されたような駆け足的パック旅行なら別だが、創造的な旅を志向するならやはり郷に従うべき。かれらのライフスタイルに合わせて行動しそれが身についてくる頃には、旅の収穫もずいぶん大きくなっているだろう」（インドに触れる旅／ブルーガイドブックス 1988 年)。安全で快適な旅とは逆で、受け入れ意識もないコミュニティに押しかけて実地体験する。ウヒャーッと毎日驚くことばかり、何が生じても自己責任といった見知らぬ世界への探検には興奮しますが、ポピュラーではありません。

それでも、日本のいまの中高年世代はかなり旅慣れています。自分の趣向を満たすために役立つ旅行パックはどれか、商品を見分ける力をつけています。そこで、改めてトラベルエージェントの働きを見てみる必要があると思います。トラベルエージェントは旅行デザイン（企画、斡旋、販売、品質管理、価格管理・・）などを担当しています。実のところ私はトラベルエージェントのパッケージツアーを体験したことがあまりありません。たいてい研究室の調査グループで、海外から留学生がやってくれば向こうの先生や院生との交流に出かける。時には学会の前後の単独行もある。観光を研究していればどこへ行っても公務出張といえるのでなかなか純然たる物見遊山になりにくいのです (笑)。ただ、いろんなトラベルエージェントの広告を見ていると近年の新しい傾向がうかがわれます。興味や目的別の行先、訪問先やルートもタイミングよくセットしています。乗り物、宿泊サービス、現地訪問先・コース、オプション、料理にわたるかなり詳細な情報が入手できます。ガイドも重要なはずですが、あまり詳しくありません。

人びとはこれらの要素情報から自分に最適の旅行を組み立てているでしょうか。IT を駆使している人も増えています。でも、たいていは

トラベルエージェントで相談してセットで購入します。とくにテーマ、季節、乗り物、宿泊施設、お料理、ガイドまで適切なサイズに組み合わせ、そして、かなりミドルアッパー向けの仕様で、この価格でといったパッケージなメニューとして商

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

品化するのはすごい能力だろうと思います。デザイナーのサインを付けておくとか、年間コンクールで表彰してみると、メンバー構成が判ると思われます。

普通の工業製品や日常消費財であれば、生産から流通そして消費までの流れが分かりやすいのですが、旅行商品ではそれがあまり分かりません。旅行パッケージの製作者、製作スタッフと能力、品質管理、特に顧客の満足度など、現代の「御師[5]」の役割を果たすトラベルエージェントの姿についてもっと知りたいと思います。

これからの観光について人々がどんな観光活動をしたいのか、どういう観光であれば満足度が高いのかを考えてみると、その一つの側面に、旅行者自身が旅行パッケージの企画段階から参加し、提案するという旅行も多くなるのではないかと思います。いわゆる業界のプロが考え抜いたパッケージなどはよくできているのですが、何を活動のテーマにするか、観るのか、どんな経験をしたいのか、どんな人に会いたいのか、そういうオプショナルテーマをツアーとして具体化するためにゲストグループとホストグループとが事前にテーブルを囲むような場を作り、その設営や助言サービスできれば、もっとユニークな旅の商品化や良好な品質の管理もできると思います。

私のさらなる提案は、こうした旅行デザインの実務とは別に、ホスト側もゲスト側も色々な人々や組織が参加するガイド研修のネットワークをつくることです。注文メニューにも応じられるようにしたいものです。観光客サイド＝ゲスト側は、この数十年間の旅行経験から目が肥えていますし、事前情報も手に入れやすくなっています。観光客はいわゆる名所めぐり＝通り一遍の見物では満足しません。テーマや季節を選んだ少人数のツアーや、滞在先で選択できるオプショナルツアーも工夫される時代に入っています。TV 放送でもブラタモリや家族・住まい探訪など、ちっちゃいテーマで 60 分番組をもたせるような深い読込みもあったりして地域発見の旅は更に複雑に広がりそうです。

●国土スケールで観光を考える：人口の定住配置移動

これは、これからの観光流動を考える基本となる課題です。大都市圏への労働人口の集中、地方小都市農山村圏への休養旅行の流出という在来パターンがこれからも続くのでしょうか。あちこち海外を旅してきて、日本列島を見返してみると、じつに国土がきめ細かく形成されていることに気付きます。島嶼や半島、湾、海浜、山と谷と河川のバランス、豊富で美味しい水、はっきりした四季の気候、それぞれの区分に発展してきた小都市とその文化、伝統が受け継がれてきていることに感謝します。地質構造などからしてあらゆる災害の多発国で国土の運営は困難を伴っていますが、そこに生きる姿も含めて風土の緻密さがあります。それゆえ、世界の観

---

[5] 御師（おし/おんし）：社寺への参拝者を案内し、参拝や宿泊などの世話をする人のこと。伊勢神宮では御師が全国を巡り、神社信者の檀家を拡げ、全国に伊勢信仰を広めた。

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

光ゾーンから見ても大変貴重な資源だといえましょう。それがいま危機にあります。
　きめ細かい景観はそれぞれに定住してきた人々によって培われてきたものです。これが過疎から限界集落、居住放棄などによって崩壊しないかどうか心配です。今後、海外からの投資を含む大規模な土地買占めによるリゾートゾーン開発（別荘、遊戯施設、ゴルフ、スキー、マリーン…）が進行しそうですが、どうすれば定住人口を維持できるでしょうか。国土交通省が示唆しているグリーンツーリズム構想では、農林漁業生産や地方産業を維持してくためにＵターンやＩターンの定住人口を最小限確保しようとしているようですが、さらに、イタリアの農村のように、中長期・季節滞在の住民を迎え入れたり、また地域づくりを域外から支援する新たな郷友会会員、支援ボラティア、地域事業出資者なども募集するなどして、新しい地域作りのシェアホールダーを増やすのはどうでしょうか。その場合の魅力要素の一つは観光活動の活発化です。これらの人々も参加する地域型トラベルエージェントを組織し、ゲストサイドと応答できるようになれば、行楽ツアーや滞在も充実するでしょう。

●高齢化社会と観光

　一般に高齢化に伴い、旅行活動は鈍くなると考えられがちですが、団塊世代や団塊ジュニア世代は旅慣れています。限られた日数での早周りよりも滞在日数を長く取ることも大切です。ここで、滞在型住民といったコミュニティ、縁故を培っておく意味があります。彼らはホストとゲストをつなぐコンシェルジュのように活躍してくれるでしょう。またそれなりに仕事を分担するといった滞在型定住パターンが注目されるでしょう。大都市圏外にも滞在場所を持つ、複数居住地住民とか地域交流縁故関係者も観光の一形態となるかもしれません。観光とリゾートと居住の組み合わせも考えてみるべきでしょう。
　国土各地において、大都市圏内でも小都市農村圏内でも、それなりの定住が継承されるように、その地域の魅力発見と発信のための多彩な観光活動オプションの提案が待たれます。

●人類のツーリズム学を

　結びとして、世界における日本の産業や文化、学問を考えるとツーリズム現象は国や民族の相互交流と理解の重要な機会です。そして地域づくりにおいても自らの特性を知りユニークな役割果たす可能性を探る機会であるといえましょう。
　観光庁はやっと発足したばかり。自治体にいくと観光担当は商工経済課の片隅にあるだけのところさえありますね。観光に関する会議も、衛生や安全、宿泊や土産物、観光施設関係業界の人たちだけの集まりに留まっていることもあります。自然環境や景観、歴史文化財、地域ヒストリー、地域の魅力を支えている人々や組織、ガイドと博物館、またローカルルートで連なる近在自治体との連携などが協議されていないようです。観光客分析についても入り込み客数の増減だけに注意が払われ

Copyright(c) 2016 Japan Travel Bureau Foundation All rights reserved.

ているようで、滞在日数や行動パターン、旅行後に持ち帰った印象などの把握と分析、現在のパッケージプランの評価など、もっと正面から旅行に対する関心を払ってほしいです。

近年、高等学校に観光コースが設けられている自治体もあり、大学でも本格的に観光学科が創設されるようになりました。さらには北海道大学のように観光学大学院や高等研究センターを設けているところもあります。北海道大学では、JICA と協力して発展途上国における世界遺産指定地域周辺＝バッファーゾーン地域の町並み保存と環境整備の住民ワークショップを開催し続けています。そこには人々の相互理解をいっそう促進しようとする心意気を感じます。

観光地域の研究としては、定住人口、社会文化、経済効果、新しい資源の開発、観光客の受け入れと適切なガイドヘルプ（接客様式）、観光経済の地域循環パターンなどしっかりしたデータも欲しいところですね。

ツーリズム政策はもとより、これからのツアー・観光旅行の基本形や多様な展開を設計するにあたって、観光客サイドや受け入れホストサイド、地元地域、そして旅行情報を提供し旅行パッケージを具体化する旅行会社＝サービスエージェントの新しい研究サークルが必要な時だと感じています。また海外の地域旅行連携組織とはどうつながっているのか、そういった略図研究もどなたかにお願いしたいところですね。

少々まとまりに欠ける語りとなりましたがフォローしてくださりありがとうございました。

2015 年 10 月 6 日
京都市景観・まちづくりセンターにて

取材者：公益財団法人日本交通公社観光政策研究部
梅川智也、西川亮

2016 年 6 月 13 日文章校正終了

本レポートの引用・転載に関しましては、以下 URL をご確認ください。
http://www.jtb.or.jp/etc